NEWS きのくに

GREEN COMMUNITY COLLEGE

Vol.10【1】
2008〈春〉

きのくに活性化センター

発行責任者／中田肇　発行日／2008年4月30日

〒646-0011 和歌山県田辺市新庄町3353-9
和歌山県立 情報交流センター ビッグ・ユー内
TEL&FAX0739-26-9670
http://www.aikis.or.jp/~aoi-kii/

高原から果無山脈を望む

熊野の新たな観光拠点、地域活性化をめざす

田辺市中辺路町高原に2008年４月、熊野古道の宿霧の郷たかはら（小竹治安代表）がオープンした。

高原地区は、標高400メートルほどの山の上にある集落で、40戸あまりの家が熊野古道のとおる尾根沿いの道を中心に点在する。室町時代の建築と伝えられる高原熊野神社が建ち、棚田と眼下から湧き上がる霧の風景が美しい。

「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録されてからまもなく４年、熊野地域に時代の光があたりつつある。霧の郷たかはらは古道観光の新たな拠点、地域の活性化をめざし、和歌山県観光連盟が「平成の旅籠事業」として整備した。行政が設置し民間が運営する、「公設民営」の宿となる。

柏崎さんはＩターン青年

熊野古道の宿「霧の郷たかはら」

宿は木造平屋建て、木の香がここちよい。キャッチコピーは「天空の宿」。樹齢100年を超える木を、田辺市の林業家が寄付した。客室は和・洋室８室（定員28人）、室内と露天の風呂がある。料理は地元の女性たちによる手づくりで、食材の野菜、山菜は最大限地産地消をめざす。午前11時から14時までのランチタイムの、地元の食材にこだわったメニューも早くも話題になっている。スタッフは10人。フロントマネージャーをつとめる柏崎眞人さん（31歳）もそのひとり（写真）、この宿のオープンを機に両親が住む高原にＩターンした。「熊野の歴史、自然、ひとのあたたかさ、都会にはないものがここにはある。それは熊野という空気」、熊野から全国に情報を発信する新たな拠点をめざす。やりたい夢もある。

山上の営みも、朝霧も、熊野から果無につづく山並みも美しい高原。その一方で、人口の減少、高齢化は深刻だ。高齢化率は50％を超す。若い世代を迎えて女性・高齢者も参画する霧の郷たかはらは、新たな観光・交流拠点として、中山間地域における地域活性化のモデルとして、さまざまな挑戦を期待したい。

CONTENTS

●熊野の新たな観光拠点、地域活性化をめざす　1面
●きのくに活性化センター活動報告　2面
●産官学一体となったまちづくり　奥村建二　3面
　川上不白を偲ぶ茶会を開いて　筑紫充代
●「利休の再来」川上不白　岩崎竹彦　4面
●茶の湯文化を商店街の活性化に活かす　鈴木裕範　5面
●地域との連携活動　6面
　きのくに活性化センターの構成

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.10【2】
2008〈春〉

きのくに活性化センター 2007活動報告

「茶人・川上不白とまちづくり」事業を地域と連携して展開

きのくに活性化センターは、2007年度事業として新宮市で「茶人・川上不白とまちづくり」事業を展開してきました。

川上不白は、江戸時代から始まる茶道江戸千家の流祖で、日本の茶道史に大きな足跡をとどめています。が、その業績はこれまでふるさとにおいてふさわしい評価がされてきたとは言い難いのが現状です。

そこで、きのくに活性化センターは2007年に新宮市、新宮商工会議所に、不白の没後200年になるのを機に、このすぐれた茶人・文化人である川上不白に光を当てなおし、まちづくりに活かす事業を提案し、これを受けて市、商工会議所が中心になって取り組むことを決定しました。

そして、地元茶道関係者、菓子商工組合、市教育委員会、和歌山県東牟婁振興局、そして和歌山大学、きのくに活性化センターが参画して川上不白顕彰事業実行委員会を発足させ、事業を推進してきました。

主な事業は、つぎのとおりです。

●没後200年記念　茶人川上不白を偲ぶ茶会

2007年12月８日　新宮市にある不白ゆかりの本廣寺で江戸千家宗家川上閑雪家元を招き御供茶会を開催。また、同寺と宗応寺で茶会を開く

●資料集「熊野・新宮から見た川上不白の風景」の刊行

●観光マップ「茶人・川上不白ゆかりのまち歩き　城下まちのお菓子食べ歩き」を作成

茶人ゆかりの地をめぐりながら和菓子等を楽しむあらたな観光コースを提案

本廣寺での御供茶式

不白の霊前に茶を供える

参加者に茶道具について話す川上閑雪家元

資料集
「熊野・新宮から見る川上不白の風景」

観光マップ「茶人・川上不白ゆかりのまち歩き　城下まちのお菓子　食べ歩き」

川上不白

かわかみ　ふはく

享保４年(1719)～文化４年(1807)

丹鶴城址の不白顕彰碑

江戸時代の茶人。号は孤峰、宗雪など。江戸千家の流祖。紀伊藩水野家の茶頭。

水野家家臣の次男として新宮城下に生まれた。16歳のときに表千家七代如心斎天然宗左に師事、32歳で真台子を伝授され、若くして茶人としての力量を認められる。師の意向を受けて江戸へ、千家流の茶道を広める。その茶の湯は皇族・大名・旗本から豪商・町人・職人まで、江戸の多くの人たちから支持を得る。

文化４(1807)年、江戸で死去。享年89歳。

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.10【3】
2008〈春〉

産官学一体となったまちづくり

きのくに活性化センター企画運営委員
新宮商工会議所事務局長 奥村建二

新宮市は、熊野信仰の聖地として、また水野家3万5千石の城下町として栄え、多くの文化人、偉人を輩出してきました。市がめざすべき都市像も「人が輝き文化奏でる都市」と定め、豊かな文化の町としての再生に力を注いでおります。

このようななか、2007年度にきのくに活性化センターの事業として。新宮市出身の茶人・川上不白にスポットをあてたまちづくりの提案を頂きました。事業実施に当っては、行政・観光協会・表千家・菓子組合の方々など関係する多くの団体の皆様に参加を呼びかけ、継続的な事業実施を目標に実行委員会を組織し、事業を展開してきました。新宮商工会議所は、コーディネートをする事務局を担当しました。

実行委員会会議風景

とくに、茶の湯という日本の伝統的な文化とはいえ独特な世界を通してのまちづくりということで、菓子組合や表千家の皆様方の協力は必要不可欠なものがありました。不白に関連した菓子の新商品の開発、不白を偲んでの献茶や茶会の実施など、積極的な提案を頂きながら事業内容を決定させていただきました。

事業の柱である茶会は、12月8日に江戸千家宗家川上閑雪家元のお勤めによる御供茶式・拝服席(茶席)と表千家音無会による副席(茶会)を、盛会のうちに開くことができました。

この春には資料集として『熊野新宮から見る川上不白の風景』を刊行しました。不白に関する地域からの視点に立った資料集です。不白研究に一石を投じたいという思いから作成しました。また、「茶人・川上不白ゆかりのまち歩き 城下まちのお菓子 食べ歩き」を作りました。これは、不白と新宮市の菓子文化にスポットを当てた、新宮市の新しい観光の仕方を提案するマップです。

産官学民が一体となった今回の取り組みが、地域に根付き、まちづくりの一助になればと大きな期待をしているところであります。

川上不白を偲ぶ茶会を開いて

表千家音無会会長 築紫充代

小春日和の天候に恵まれた12月8日、新宮市の本廣寺・宗応寺において「没二百年記念茶人川上不白を偲ぶ茶会」が盛大に行われました。約350人の方々に参会していただき、この地では初めての大きな茶会となりました。

不白が創始した江戸千家流の宗家十代・川上閑雪家元様に、不白に縁のある本廣寺にて法要御供茶式および拝服席を担当していただき、不白が表千家七代如心斎宗左家元に師事していた縁から表千家音無会が副席を担当させていただきました。

菓子商工組合の方には、「不白」「熊野」の題でお菓子を作っていただき、茶席で出させていただきました。いずれもそれぞれのお店が工夫と技を競われた新作で、また、お菓子のお土産もあり、皆様に好評でした。

新宮市のまちづくりのひとつとして、新宮出身である川上不白を偲ぶ茶会を催そうと、実行委員会が設立され、このなかにわたしたち表千家音無会も参加させていただきました。

話が進むにつれて次第に大きな計画になり、しかも、時期が秋とのことで準備期間が短く、道具等準備が整うか不安でいっぱいでしたが、実行委員会の皆様、表千家同門会和歌山県支部、会が師事している久馬規正先生のご支援・ご指導をいただき成功裡に終えることができました。わたしたち音無会会員も色々と経験させていただき、大変勉強させていただきました。心より感謝申し上げます。

これからも、「川上不白を偲ぶ茶会」開催の機運があり、これを機に郷土の生んだ茶人と茶の湯文化に光があて続けられることが期待されます。茶道を学ぶ一人として、熊野での茶道の発展につながり、新宮市のまちづくりに寄与できればと思っております。

左から 沖崎さん 築紫さん 広里さん

紹雪副家元のお点前でお茶をいただく

茶会の会場となった本廣寺の本堂

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.10【4】
2008〈春〉

「利休の再来」川上不白

熊本大学文学部准教授 岩崎竹彦

茶の湯を大成した千利休の名をしらない人はまずいないであろう。ところが、村田珠光・武野紹鷗・古田織部になると、かなりあやしくなってくる。学生に聞いてみても「？？？」という反応が返ってくることも珍しくない。この３人はいずれも茶の湯の歴史を語る上で欠かせない存在であり、高等学校の日本史の教科書にも出てくる。もっとも、そうでない教科書もいくつかあって、「だれ？」となるのも無理からぬことかもしれない。というよりは日本史をちゃんと学習させない現今のカリキュラムに問題があるのだろう。

ところで、江戸時代に「利休の再来か」とまで讃えられた茶人がいる。紀州新宮が生んだ茶匠・江戸千家流祖川上不白（紀州藩付家老水野家茶道、1719－1807）その人である。不白は享保18年（1733）15歳のときに離郷し、京都で茶の湯修行の後は江戸に活躍の場を求め、その流儀が江戸・東京で花開いたことから、残念ながら和歌山ではあまりしられていない。しかし、江戸での不白はとても高名な茶匠で、皇族・大名・旗本御家人・大名家中・僧侶・町人など、社会の各階層にわたって多数の人々が門に入っていた。そのことを示すエピソードを紹介しよう。不白の葬儀は、葬列の先頭が菩提寺である谷中の安立寺に到着しても、最後尾はまだ牛込赤城明神下の屋敷を出ることができなかったという。いかに多くの人々が別れを告げるために参列したのかがわかる。さらに道統からも優れた茶人を輩出した。嘉永４年（1851）に板行された「茶人番付」は東西の大関を川上不白と川上宗寿が占め、東の関脇には川上謂白、前頭には川上宗幸・川上不羨の名が記されていた。いま不白の活動を歴史的に意義づけるなら、それは形式化していた武家文化としての江戸の茶を、町人文化として新たな展開をとげた千家の茶に改流せしめた点に求められよう。乱暴な言い方をすれば、利休を流祖とする千家流茶の湯の全国展開は不白が原点であった、と見ることも可能なのである。そして、いまや江戸千家宗家（東京都文京区弥生）の直門教場及び不白会支部は北海道から沖縄まで全国46か所に及び、海外はハワイ支部とロサンジェルスにも教室をおき、隆盛を極めている。紀州はそのことを誇りにすべきではないか。

さて、このところ大学の同級生であり30年来の畏友である岐阜大学教授森田晃一君と面白いことを論じ合っている。それは不白の活動を追うことで当時の政治状況が見えてくるのではないか、ということである。このことは森田君が各階層にわたる不白の門人を詳細に調べ上げた結果導き出された仮説なのだが、興味深いのは不白の活動の中心に紀州人脈が控えていることである。さらに紀州藩付家老水野家９代忠央が政争に敗れ、万延元年（1860）幕府から隠居並びに謹慎を命じられた折、川上宗幸を伴って新宮に下向していた。そのことが何を意味するのか。今回お伝えできないのが残念である。いずれ改めて……

江戸千家宗家所蔵の川上不白像のレプリカ（本廣寺蔵）

本廣寺境内に建つ不白ゆかりの書写妙法蓮華経印塔

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.10【5】
2008〈春〉

茶の湯文化を商店街の活性化に活かす
江戸時代の大名茶人松平不昧が生きるまち・松江市

和歌山大学経済学部准教授 鈴木裕範

不昧公ゆかりの明々庵で筆者

島根県松江市の中心地に、観光客が大型観光バスで訪れる商店街がある。目当てはお茶の体験と、そして和菓子である。地域に生きる茶の湯文化をまちづくりに活かす商店主たちの経営戦略が、衰退しかけた商店街ににぎわいを創り出した。

松江市の天神・寺町商店街は、江戸時代初期からの古い歴史を有し、かつて「松江一の繁華街」と謳われた。しかし、商店数は現在約50店舗、近年の郊外店の増加にともなって客足が遠のき、店じまいをするところが出てきた。そうしたなか、2005年４月将来への危機感をバネに、みずから商店街の活性化をはかることをめざす会が発足した。名前は「松平不昧公好み老舗会」、参加したのは茶舗と和菓子店の５軒の経営者である。

松平不昧公は、江戸時代後期の松江藩七代目藩主治郷。不昧は号で、大名茶人として名高い。市民は今日でも「不昧公」「不昧さん」と親しみをこめて呼ぶ。

「好み」は、美意識をあらわす言葉である。このまちには、「不昧公」が生き、茶の湯の伝統が暮らしに溶け込んでいる。「市民の三分の一は家族で抹茶を飲み」、「抹茶をポットの湯で気軽に楽しむ」人がいる。スーパーマーケットの店頭に抹茶のディスカウント商品が並ぶ土地柄なのである。

茶の湯人口のすそ野の広がりは、豊かな和菓子文化を育ててきた。創業は江戸・明治時代という老舗が何軒もあり、自慢の「銘菓」をもつ。松江市は和菓子の世帯当たり消費量日本一で、和菓子店だけでいまも25軒を数える。茶室を備えた寺や施設があり、買い物客が抹茶とともに味わえる和菓子店や和菓子づくり体験工房がある。松平不昧公好み老舗会の名前は、そうした歴史風土を背景としている。

老舗会の商店街活性化策は、観光客の誘致による商店街の再生だった。松江市を訪れる観光客は、年間800万人を超える。そうした観光客が歩き、買い物でにぎわう商店街をめざしたのである。そのための「旅行商品」が、抹茶と和菓子の体験・お土産ツアーだった。それは、こうである。

創業126年という茶の製造販売の老舗中村茶舗で、石臼を使った抹茶の製造工程を見学し、にじり口のある茶室で茶の湯を体験(有料)してもらう。茶と文化にふれたあとは、和菓子店をめぐる。多くの客が、茶や菓子を土産に買って帰る、その間約１時間。中高年世代、女性の人気が高い。

老舗会は県観光連盟に加盟し情報発信するとともに、このツアーモデルを旅行会社、エージェント等に売り込んだ。注目度は年を追って上昇し、初年度80台だった観光バスの乗り入れは'07年度300台に達した。ざっと、１万５千人が訪れた計算になる。こうした天神・寺町商店街はいま、松江市でもっとも元気な商店街と呼ばれる。「和の文化」を「観光・文化都市」の重要な戦略に位置付ける松江市による、駐車場確保などの支援もみのがせない。「自助・共助・公助」のまちづくりである。

不昧公好みの茶が並ぶ

老舗会の取り組みは、地域の文化に着目し、みずからの「足もとを深く掘る」ことの重要性を教えている。文化や伝統をまちづくりに活かす可能性や商店街活性化を考えるうえで豊かな示唆を与えている。老舗会の焦眉の課題は、観光客によるにぎわいを、いかに商店街全体の活力に広げるかだ。協同組合松江天神町商店街の中村寿男理事長は、「コミュニティを見つめ直すことが重要」と言い、高齢者・障害者参加による街づくりを推進する。キーワードは「やさしさ」、茶の精神のもてなしの心にも通じる。

に、しても、江戸の大名茶人が誇りとして生きる文化的な風土は、どこから生まれるのか。歴史？気質、それとも価値観の違いによるものなのだろうか。

老舗会の事務局がある中村茶舗

奥は茶房、抹茶を一服

和菓子店三英堂の店内

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.10【6】
2008〈春〉

よみがえれ、ふるさとの町並み

和歌山大学生と那智勝浦町の住民たちが協働

格子のある町屋や老舗の呉服店、質店などが300メートルほどの道の両側に並ぶ仲ノ町。古い看板にショーウィンドウ、どこか懐かしい時間が漂う。

仲ノ町は昭和30年代ころまで、この地方を代表する繁華街であった。隣接する脇浜地区とあわせた一帯は、「銀座通り」と呼ばれた。しかし、社会経済が変わるなかでこの地区はいつしか忘れられていった。商店は激減し、高齢化が進む。

この町で、'07年春地域の再生を考えようという住民が集まり、自主的な学習会が開かれた。もう一度、にぎわいを取り戻したい。観光客が歩く魅力ある景観をつくりたい、参加した住民はそうした思いを共有していった。話し合いには住民だけではなく、町の職員、和歌山大学経済学部の教員・学生、そしてきのくに活性化センターも加わった。試みに、各家に伝わる祭りの日の「幕」や大漁旗で通りを飾る取り組みも行なわれた。そして、11月初め「よみがえれ! 脇仲倶楽部」(藤原睦展会長)が発足する。和歌山大学経済学部鈴木研究室では、10人の学生たちがゼミの授業の一環としてこの間の動きをカメラで追い、27分のドキュメンタリー作品にまとめた。

この春、仲ノ町を歩くと、数軒の民家の軒先に吊り下げられたガラス玉が目に止まった。漁業に使われた"ブイ"が、漁業の町の歴史を語りかける。昭和の匂いが漂う町並みに、一層の情緒を与える。少しずつ、しかし確実に変わりだした住民の意識。観光客、若者、女性が歩く町へ一住民たちの挑戦がつづく。

民家の軒先を飾るガラス玉

取材中の学生たち

地域女性、和歌山大学生と連携

「きのくにの秋穫祭」をプロデュース

きのくに活性化センター事務局　古久保　綾子

きのくに活性化センターは、2007年10月20、21の両日、田辺市新庄町の和歌山県立情報交流センターBig.uで開かれた恒例のイベントU遊祭に参加した。

きのくに活性化センターの今回の企画は、地域の女性と和歌山大学生との連携で地域のすぐれた食材と食を見直す「きのくにの秋穫祭」。当日は、Big.uのフロアーの一角で、田辺市の農産物直売所きてらなどの協力で地元で収穫した新鮮な秋の野菜や果実、加工品など物産の展示販売を行なった。参加した学生や女性たちはハッピ姿で、「今朝取れた新鮮な野菜です。今が旬の温州みかんです。いかがですか」と笑顔をふりまき、"地産地消市"のまわりは来館者の人気を集めていた。

また、身近な素材を料理の面から見直してもらおうと、みなべ町で農業を営むフードコーディネーター垣淵ひろ子さんを招き、地域の野菜を使ったデザート教室を開催した。この教室は女性の関心が高く、若い女性たちが多数参加し、垣淵さんの指導でデザート作りに挑戦、「野菜からデザートが出来るなんて」と驚きと楽しい声が。

'07年度のU遊祭は、過去最高ののべ１万７千人が詰めかけ、きのくに活性化センターの企画は人々に和歌山県産野菜や果実の良さを再認識してもらう機会を提供できたと考えている。参加した女子学生の一人は「地域の方と交流が出来て良い機会になりました」と話していた。

和歌山大学の
大学院・学生らも参加

きのくに活性化センターの構成

きのくに活性化センターは、以下の団体・機関で構成されています。（2008年５月１日現在）

- 田辺周辺広域市町村圏組合
- 新宮周辺広域市町村圏事務組合
- 田辺商工会議所
- 新宮商工会議所
- 紀南農業協同組合
- 和歌山県
- 和歌山大学

書籍紹介

●『地域再生への挑戦 地方都市と農山村の新しい展望』
橋本卓爾・大泉英次編著
日本経済評論社　定価 2400円＋税

連携・協働・交流こそ地域再生の条件。和歌山大学経済学部の教員グループが衰退する地方都市と農山村の活路を「和歌山モデル」として提示。

編集後記

和歌山大学の大学院・学生と北山村でのじゃばら収穫体験(ボラバイト)に参加しました。

じゃばらは、比較的平地で栽培されており、収穫は楽に思えましたが、実際長時間秋の日差しのもとでの作業はなかなか大変。毎日作業している方の苦労も感じながら土地の食材を活かした手料理を朝夕いただいき、村の話に耳を傾けました。

美しい山並みと季節の移ろいを伝える木々。しかし、若者が残れないふる里。学生たちは、村の厳しい現実を知る一方、オンリーワンでナンバーワンを目指す観光戦略に、質問を繰り返していました。きのくに和歌山には、学生たちが学ぶことが可能なフィールドがいっぱいあります。学生が地域に入り、地域住民とのさまざまな行動を起こしてくれることを願っています。(あ)